
ベランダの向こう、僕らの世界

藤安

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベランダの向こう、僕らの世界

【Nコード】

N3830T

【作者名】

藤安

【あらすじ】

ベランダの向こうに極楽浄土？——いえいえあるのはプラットホーム。

何処へ行くの何処へ行こうか何処へ行きたい？

『車掌さん』の瞳が濃くなったように見えた。

「乗るんだね？」

「乗らない方がいいの？」

さあそれは分からない、と『車掌さん』は呟いた。

「良かったのか悪かったのかは君が決めるものだろう」

だから僕は踏み出した

ベランダの向こうは、とても綺麗に見えた。少なくとも、今自分がいる場所よりかはずっと。

ベランダの向こうに行けば、全部忘れられると思った。そんな極楽浄土が存在すると、漠然と思っていた。

ベランダの向こうに行きたいと思った。

——だから、足を踏み出した。

気が付いたら、座っていた。尻の下と背中に固い感触。手のひらにはつるつるした何か。

いつのまにか閉じていたらしい目を開くと、自分が固いいすに座っているのが分かった。いや、いすというのは正しくない。四つのいすが横にくっついた、ベンチだ。くすんだ黄色をしていて、新しくも古くもない。これは何だっけと考えると、すぐに答えは出た。プラットホームにあるベンチだ。だからつるつるしているのだ。自分は今、ベンチに座っている。でも、それなら。

顔を上げると、思った通りの景色があった。

銀色に鈍く光る線路。頭上には屋根。それを支える柱。だが、肝心の駅名が書かれているはずの看板はどこにも無い。それに、今はどうやら夜らしく、光も無かった。けれどそれにしたらおかしい。人工の光はもちろん。月の光も星の光も無い。どこにも。それなのに、自分がある駅と線路はしっかりと見えている。言い換えるなら、

それだけしか見えない。

何となく、一方の線路の行く先を目でたどってみる。銀色のそれは、目を凝らす前に黒の中に消えていた。そこで無くなっているのか、それとも闇の中に吸い込まれているのか。逆方向も試してみたが、同じだった。

自分と、駅と、線路の一部分。

見えるのはそれだけ。光が無い音も無い。黒に浮かんでいる、自分と、駅と、線路。

何も感じなかった。怖いとか、気持ち悪いとか、そういう感情が何も浮かんでこない。そもそも、それらはどういう気分の時に使う言葉だったか。首を傾げてみるが、分からない。何で分からないんだろうかと再び首を傾げてみるが、分からない。ずっとここにいるのか分からない。じゃあどうしてここにいるのかと考えてみるが、頭に浮かぶのは何も無い。自分と、駅と、線路。それが、それだけがはっきりしている。

それじゃあ、と思った。

それじゃあ、今から自分は何をすればいいんだろう。どこへ行くんだろう。目の前にある線路を見つめる。この、銀色の道が自分をどこかへ連れて行ってくれるのだろうか。もう一度視線を横へ滑らせてみるが、やはり途中で切れている。違うのか。それじゃあこの線路は何の為にある。それを言うなら、この駅も、自分自身もだ。自分は、何の為にここにいて、何の為に作られた駅にいるのだろうか。分からないことしかない。ゆっくりと息を吐く。自分自身に聞かせるように、ゆっくり。

その時だった。

遠く、ずっと遠くの闇の中から、靄のかかった低い音が聞こえたような気がした。

吐き出した息を思わず止めて、耳を澄ましてみる。

低い音。右の方向からだ。轟き、響き、この駅に微かな振動を伝

える。そして少しずつ近付いてくる。曖昧な音から、確実に聞こえる音へと変化していく。

低い音。脈拍のように一定のリズム。しっかりと耳に届いても、やはり何も感じない。ただ、その音を作り出している何かの闇の奥、線路が続いている筈の所からこちらに向かつて来るのを受け止める。途切れることなく響いてきたその音は、駅の近くまで来ると急にそのリズムのペースを落とした。それと同時に音の大きさも小さくなる。顔を横に向けて、やっとそれを視界に入れた。やはり光を発していないのに見えるそれ。線路よりも少し暗い銀色をした車体。その下部には深い青色の線が一本はいつている。それから大きめの窓。普通行き先が示してある筈なのだが、先頭部分の、それが書いてあるだろう部分には『行』という一文字しか書かれていなかった。……行き先は決まっていらないらしい。

車体の全部が視界に入った時、それがたった一車両しかないのに気付いた。『電車』と呼ばれる物は大抵何車両かくつついているのではないか。少し考えたが、どうでもいいと思って止めた。無駄なことを考えるのは無駄だ。今現在、自分の目の前に一両の電車がある。大切なのはそれだ。

そうして僕は乗客に

ドアがちやうど正面にくるようにして、電車は止まった。線路と車輪が擦れる高い音が、長い尾を引かせて響く。続いて溜息のような、空気が抜ける音がする。ベンチに座ったまま見つめていると、ドアが静かに開いた。

自分はこれに乗るべきなのか、と思う。

もし乗ったとしたら自分はどこに行くんだろう。

少し考えて、また考える行為を止めた。そう言えば、さっぱり分からないことを考えるのもまた、無駄に分類されるのだ。

大きな窓から見える電車の中は至って普通のようなだった。車体と平行の座席に、たくさんの吊り革。誰も乗っていない。

と、運転席の方から黒い影が歩いてくるのが見えた。ほっそりした、背の高い影。女性かと思ったが、それはドアからひょっこりと顔だけ覗かせたその人物を見て曖昧になった。

中性的な顔立ちだった。纏う気配に女性らしさはない。肩より少し上までに切られた細い黒髪に、それと同色の、落ち着いた光を浮かべた細い目。顔の部品はどれも形が良い。服は黒いスーツで、それが線の細い体に合っていた。頭の上にはつばの付いた帽子を潰したような、いわゆる車掌用の帽子が乗っている。歳は、まだ十代後半といったところだろうか。

「こんばんは」

静かな低めの声で、こっちを見つめて『車掌さん』はそう言った。挨拶をされたら挨拶を返すのが礼儀だから、座ったままで頭を下げた。

「……こんばんは」

『車掌さん』の元から細い目がますます細くなった。口の端がわずかに上がる。ホームに片足を付けた『車掌さん』は、右手を電車の中へ伸ばして指先を揃えた。

「乗るのならどうぞ自由に。……乗らないのもご自由に」

どうしようか、と考える間も無く、足が勝手に力を入れていた。ずっと、なぜ今まで立たなかったのかと思う程簡単に両足が体を支える。足の裏に、固い地面の感触。ドアのすぐ前まで来ると、『車掌さん』の瞳が濃くなったように見えた。

「乗るんだね？」

「乗らない方がいいの？」

さあそれは分からない、と『車掌さん』は呟いた。黒い目がこちらをじっと見つめる。

「良かったのか悪かったのかは君が決めるものだろう」

「そうだね」

足を踏み出した。自分じゃない何か、喉に手を入れて勝手に言葉を引き張り出す。

「乗るよ」

「そうか」

電車の中に入ると、『車掌さん』も一緒に入ってきた。どうすれ

ば良いのか分からず立ち尽くす傍らを何も言わずに通り過ぎ、前方にある運転席らしい部屋に入ってしまった。すると、ほとんど同時にこちらの後ろのドアが閉まった。

がたん、と車体が揺れて、さっきも聞いた車輪と線路の擦れる音がする。だが、さっきとは違ってその音はくぐもっていた。倒れてしまわないように銀の棒を掴みながら、ドアの窓から外をしてみる。横に滑って行くベンチが見えた。実際横に滑っているのは自分の方なのだが、そう見えた。滑れば滑る程、ベンチは小さくなっていった。小さくなっていく速度がどんどん速くなり、次に柱が見え、やがて闇に浮かぶ駅の全貌が見えた。

「……あ」

見えたと思った瞬間に消えた。呆気なく、消えた。今度は何も見えなくなる。ベンチから見た、消えた線路の先にあったものと同じ黒が、電車の周りを包んでいた。黒、黒、黒。深い、あるいは濃い、黒。この電車はこの黒を少しでも通り過ぎているのだろうか。電車が揺れていなければ、止まっていると言われても納得しそうだ。

けれど僕は定義する

「そんな所に立ってて楽しい？」

振り返ると、運転席から出てきた『車掌さん』がいた。こちらを見ながら、後ろ手にドアを閉める。

「座っていいのか分からないから立っているんだったら、そんなものは気にしないでいいよ。座るのはご自由に。もちろん、立っているのもご自由に、だけれども」

立って外を見ても景色は変わらない。どこに座ろうか迷って、運的の壁のすぐ横の座席に腰を落ち着けた。さっきまでのベンチとは違って柔らかい。

「何か飲みたい物はあるかな」

「飲み物があるの？」

見上げた先の顔に問いかけると、『車掌さん』は帽子をかぶり直してうんと呟いた。片手を顎に当て、宙を見る。

「えっと、緑茶から紅茶、コーヒー、ソーダ、オレンジジュース、それからただの水まで……まあとにかく色々ある」

顎に当てたのとは違う方の指を折りながら数えた『車掌さん』はふっと笑った。

「どうかな？」

「じゃあ……」

ガラスの外の黒を見つめていると、その中に、グラスの中に入ったココアが浮かんできた。途端、とてつもなく喉が渴いてきたような気がする。『車掌さん』の方を振り返った。

「ココアはある？」

「もちろん」

「じゃあそれで」

分かったと頷いて運転席に戻った『車掌さん』だったが、すぐにまた出てきた。

「大切なことを忘れてた。冷たいのがいいかな、それとも温かいものの方が？」

「冷たいの」

「砂糖は」

「ほどほどで」

再び運転席に入った『車掌さん』は、すぐに二つのグラスを手に戻ってきた。二つとも、茶色い液体の中に氷がいくつか浮かんだ同じグラスだ。『車掌さん』がこちらにそれを差し出すと、中の氷がカランと涼しげな音を立てた。受け取って、すぐに口をつける。しつこくない甘さの液体が喉の中を流れ落ちていった。

「ここに座っても？」

顔を上げると、『車掌さん』がちょうど前の座敷を指差していた。断る理由も無いので顎を引く。腰を下ろした『車掌さん』は、何も言わずにガラスの外に目をやりながらココアを飲んだ。

無言の時間が流れる。沈黙ではなく、無言。

決して苦しい無言ではない。

窓の外を見る『車掌さん』を見ると、その横顔はやっぱり整っていた。顔から繋がる首は顔と同じように白い。それと対照的な黒の服が印象に残る。綺麗、と言うのか、又は格好良い、と言うのか分からない。でも、『車掌さん』は、どこか人間とは離れたものであるような気がした。幽霊とか妖怪とかというのとは違って、どう表せばいいのか、人間独特のむさ苦しい雰囲気が無い。

「誰なの？」

思わず飛び出た声に、『車掌さん』はゆっくりとこちらに顔を向けた。グラスを持っている手とは反対の手で自身を指差して、小さく首を傾げる。

「うん、そう」

『車掌さん』は眉を額の中央に寄せた。

「難しい質問だね」

答えを考えているのか、表情を変えずに窓の外に視線を戻した『車掌さん』をじっと見る。

また少し、無言の時間が流れた。

「……君は」

ぽつりと零れ落ちた言葉が、『車掌さん』との間にある距離を流れてこちらの耳に届いた。

「誰かと聞いた君は、自分が誰なのか、何なのか、分かってる？」

考えてみる。

ココアの入ったグラスに視線を落とした。先端が五つに分かれた手が、それを握っている。握れと命令しているのは頭の中にある脳だ。でも、脳はあくまでも命令しているだけだ。それじゃあ、握ろうと思っているのは誰なのだろう。

自然と、眉が額の中央に寄った。

「……難しい質問だ」

「そうだろう？」

「ごめん」

「ん？」

「難しい質問しちゃって、ごめん」

「いや」

『車掌さん』は悪戯っぽく、小さく笑った。

「難しい質問の答えを考えるのは嫌いじゃないんだ」

さあ考えようじゃないか。

そう言って、『車掌さん』はグラスに口をつけて窓の外を見つめた。でもその目にガラスの向こうの黒は映っておらず、『車掌さん』が真剣に答えを考えているんだと分かった。それに習って、同じように考えてみる。

黒に包まれた静かな空間。居心地のいい、無言の空間。目を閉じた。

「ヒト」

「ヒト？」

何となく呟いた一単語に、『車掌さん』は首を捻った。

「ヒトか。……まあ、君のことを一番よく知っている君が自分をヒトだと言うなら、君はおそらくヒトなんだろうね」

それに、と『車掌さん』は続けた。

「君は見た所ちゃんと直立二足歩行をしてるし、言葉も操れてる。ヒトの定義から外れてはいない訳だ」

「うん」

「最も、ヒトが何なのかははっきりとは分からない訳だけど。まあでも、とにかく直立二足歩行と言葉は最低条件だろう」

「うん」

ふむ、と『車掌さん』は顎に手を当てた。

「それならこちらも条件を満たしてる」

「じゃあ、あなたも、ヒト、なの？」

「どうだろう。さっきも言った通り、ヒトが何なのか分からない」

「じゃあ……？」

「おそらくヒトである君はどう思う？一両電車の中にいるこの、黒い服を着た生き物は何だと？」

おかしそうな目でおどけた調子で尋ねてきたその問いに、思わず笑った。そんなもの、初めて見た時から一つしかない。

「『車掌さん』」

きつと僕の思考回路

『車掌さん』は、目をぱちくりとさせた。それから、本当におかしそうに顔をくしゃりとさせて笑う。その手に握られたグラスの中の氷が、溶けて再び音を立てた。

「その案を採用しようか」

「ヒトとしての最低条件を満たした『車掌さん』？」

「ああ」

帽子をかぶり直して、『車掌さん』はこちらを見た。少し細められた目は笑いの余韻を残している。

「どうかな。君は、その答えで満足？」

「……多分」

「多分か。随分と曖昧だね」

自分の中の気持ちを整理してみる。満足するとは、どんな感じだったか。

「……分からない」

「曖昧であることが？それとも自分の気持ちが？」

「自分の気持ちが」

でも、と続ける。

「胸の中がすっきりしたから、不満ではないと思う」

「そうか。それじゃあ、晴れてこの生物は『車掌さん』となった訳だ」

問題解決だね。

静かにそう言って、車掌さんはグラスに口をつけた。喉が小さく動くのを見つめる。単語が浮かんだ。

ヒト。車掌さん。

空気の中に浮かぶそれらの文字を見つめる。グラスに一杯になった水が溢れるように、口から言葉がこぼれた。

「車掌さんが『車掌さん』なら、車掌さんは完全にヒトだ」

「ん？」

首が動き、わずかに見開かれた目がこちらを見つめる。視線と視線が空中でぶつかる。今、自分はどうな顔をしているのだろうかと思った。少なくとも、何かしらの心の動きが表れている筈だ。無表情なんて表情は無いから。多分。

「車掌さんはヒトだ。ヒトじゃない『車掌さん』なんていないだろうし」

「『だろう』という助動詞は不確実で、曖昧だ。見た経験が無いだけで、ヒトじゃない『車掌さん』だっているかもしれない。まあ、生き物は見えないものは見えない訳だから、絶対的に確実だと言えるものは無くて、そうだと決め付けて言うしかないんだけど」

車掌さんは帽子のつばを片手で挟んだ。顔に影が落ちる。

「『車掌さん』という単語が、必ずしも『ヒト』の上に成り立たなくてはいけないという決まりは無いような気がする」

自分の中で、何かがすんと落ちた。車掌さんの言うことは正しい、ような気がする。合ってるか違ってるかなんて分からないんだけれども。

「車掌さんは車掌さんだってこと？」

「そういうことになるね。分かりやすいまとめ方だ」
「それはどうも」

いえいえ、と呟いた車掌さんはけれど、不意に席を立ち上がった。

「いけない、分かれ道だ」

「分かれ道？」

「分岐点、と言えば言いかな。……右か左、君はどちらへ行きたい？」

「どっちでもいいの？」

「ああ」

窓の外に目をやった。依然として黒だ。車掌さんと同じ黒。どちらに行った所で何かが変わるのだろうか。分かる筈がない。適当だ。

「じゃあ左」

「了解」

車掌さんは運転席に入っていった。細い背中が視界に入り、すぐに扉で遮断された。電車が走る音が耳に大きく届く。気付いたが、結構な大音量だ。と、車体が僅かに傾いた。ああ左に行くんだなと分かる。窓の外を見つめたが、やはり黒以外の何も見えなかった。――何も変わらない。静かだと思った。電車が走る音でさえ、慣れてしまえばそれは背景となるのかもしれない。先程まで車掌さんがいた、向かい側のガラスに自分が映っている。

握られたグラス。こちらを見つめる目。

黒と電車の音を背景に、座っている。自分と自分の視線が絡む。動かない。静か。絵の中にいるようだ。

———思った。絵の中にいるヒトは、『ヒト』なのだろうか。直立二足歩行、言葉。それがヒトとしての最低条件。絵の中の自分は、『ヒト』か、『ヒト』以外の何かか。

いや、それ以前に。

自分はここにいる。それじゃあ、今見えているグラスの自分は自分なのか。ここ以外に自分はいるのか。見えている自分が自分でないなら、見えている自分は何者だ。

「……さあね」

我ながら意味不明。自分自身にお手上げ降参白旗だ。投げやりに吐き捨てて、グラスから視線を外そうとする。

その時だった。

絵が、動いた。背景が動いている。

「え」

凝視した。後ろで動いているもの。細かな、小さな、白。不規則に動いている。たくさん。

白い花びらに見えないことも無い。けれど違う。

運転席の扉が開いた。

「雪が、降ってきたね」

「うん」

「対照的な色が二つそこにあるのは、綺麗だ」

綺麗。

車掌さんの言葉に頷いた。分からないが、きっとこれは綺麗と言う。黒と白。全てに染まった色と、何にも染まっていない色。色と
いう概念の中で、正反対。
綺麗。

口の中で小さく発音する。いい言葉だ。

それが僕の表現方法

「何か聞きたい音楽はあるかな」

思わず車掌さんを見た。

「音楽もあるの？」

「あるよ。あまり多くはないけれどね。ご所望はある？」

「車掌さんの一番好きな曲がいい」

「そうか、分かった」

どこか嬉しそうに笑うと、車掌さんは運転席に入っていった。また、電車の走る音が響く。けれど今度はすぐに別の音が聞こえてきた。楽器の音だ。控えめな、ゆったりとした楽器の音。丁寧な音の群れが重なって、空間に広がる。明るい響き。それに同調するように、車掌さんの声が聞こえた。

「全体的にゆっくりで、静かで、ほっとするんだ」

「なるほど」

「でも、途中で一度、激しくて、物悲しいメロディーになる時がある」

「そこが好きなの？」

「そこも好きなんだよ。この曲は全部が好きなんだ。だから一番好きな曲だ」

「なるほど」

耳をすませる。音達は、すんなりと自分の内側へと入ってくる。

「長い曲だよ。長い長い曲だ。そこも好きなんだけれども」

見れば、車掌さんはまた向かい側の席に座っていた。ガラスを挟んだ向こうを見ている。雪は降り続いている。横顔に声をかけた。

「車掌さん」

「ん？」

「右に行っても、雪は降ったかな？」

と、車掌さんはおかしな顔をした。何でそんな事を聞くんだと言うような、聞く意味が分からないというような。けれど侮蔑するでもなく、車掌さんは自身に言い聞かせるように言った。

「分かる筈がないな。違う選択をした時に何が起こるかなんて分からないだろう。……君は、雪が降らない方が良かったのかい？」

そうじゃない。

言外にそう言って、首を振る。窓の外を白い欠片が揺らめいているのは悪くない。ただ。

「左に曲がったから雪が降ったのかと、そう思った」

「なるほど、それもあるかもしれない。この列車はどこへ行くか分からないからね」

先頭部に、『行』という一文字しか書かれていなかったのを思い出した。

「車掌さんにも、分からないんだ」

「分からないな。ただ、一つの分かれ道を過ぎるごとに行き場所の

可能性が狭くなっていくのは分かる。だから必ずどこかへは向かっているんだよ。どこへ行くか決まっていなくてもいいだけで」

「そっか」

よく分からないけど、納得した。不思議だけれど、納得できた。何でもそんなものだろう。選択肢がどれだけあったとしても、最終的に辿り着く場所は一つだ。

「君は、雪は好き？」

車掌さんの目は変わらなかった。ただ純粋な質問の様だ。考えてみる。確かに、さっき車掌さんが言ったように綺麗と表すのだと思う。でも好きかと言われるとどうだろう。好きと綺麗は別物だ。車掌さんの言葉を借りれば、綺麗と言う単語の上に必ずしも好きと言う単語が成り立たないわけではない訳ではない。心の問題だ。自問自答してみる。好きか、嫌いか。どう判断すればいいのだろう。分からない。心なんて、あやふやだ。

車掌さんは黙って答えを待っているようだった。

何度か口を開け閉めさせる。海から引っ張り出された魚はこんな感じだろうか。

「……嫌いじゃ、ない」

しばらくしてやっと自分の口から出た言葉はそんなものだった。

「はっきり好きとは言えないけれど、嫌いだともはっきり言えないって感じかな？」

「そんな感じ」

「曖昧というのは良いものだ」

皮肉でも何でも無い車掌さんのしみじみとした言葉に、思わず笑った。本当にそう思う。

「曖昧さは逃げに使えるからね。でも、さっきの言葉は逃げじゃないと思う」

「だろうね。君が自分に聞いて、考えて、それで出した答えだ。正誤は分からないけど、でも逃げではないよ、きっと」

「曖昧だね」

こちらの言葉に、車掌さんも笑った。

「ああ、曖昧だ。君は君だけだから、こっちには分からない」

そんなものだ。全ては曖昧でできている。多分。

後ろにもたれる。視界の端に白が映った。まだ雪は止みそうになり。目を閉じると、色々な種類の音が聞こえた。体に染み込むようなこの音楽も、嫌いではないと思った。車掌さんのように好きになれたらいいと、頭の端っこか心の隅っこか、どこらそこら辺で思ったような気がする。

「右か左か直進か。……どれがいい？」

「ちよくしん」

「了解」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3830t/>

ベランダの向こう、僕らの世界

2011年10月9日00時26分発行